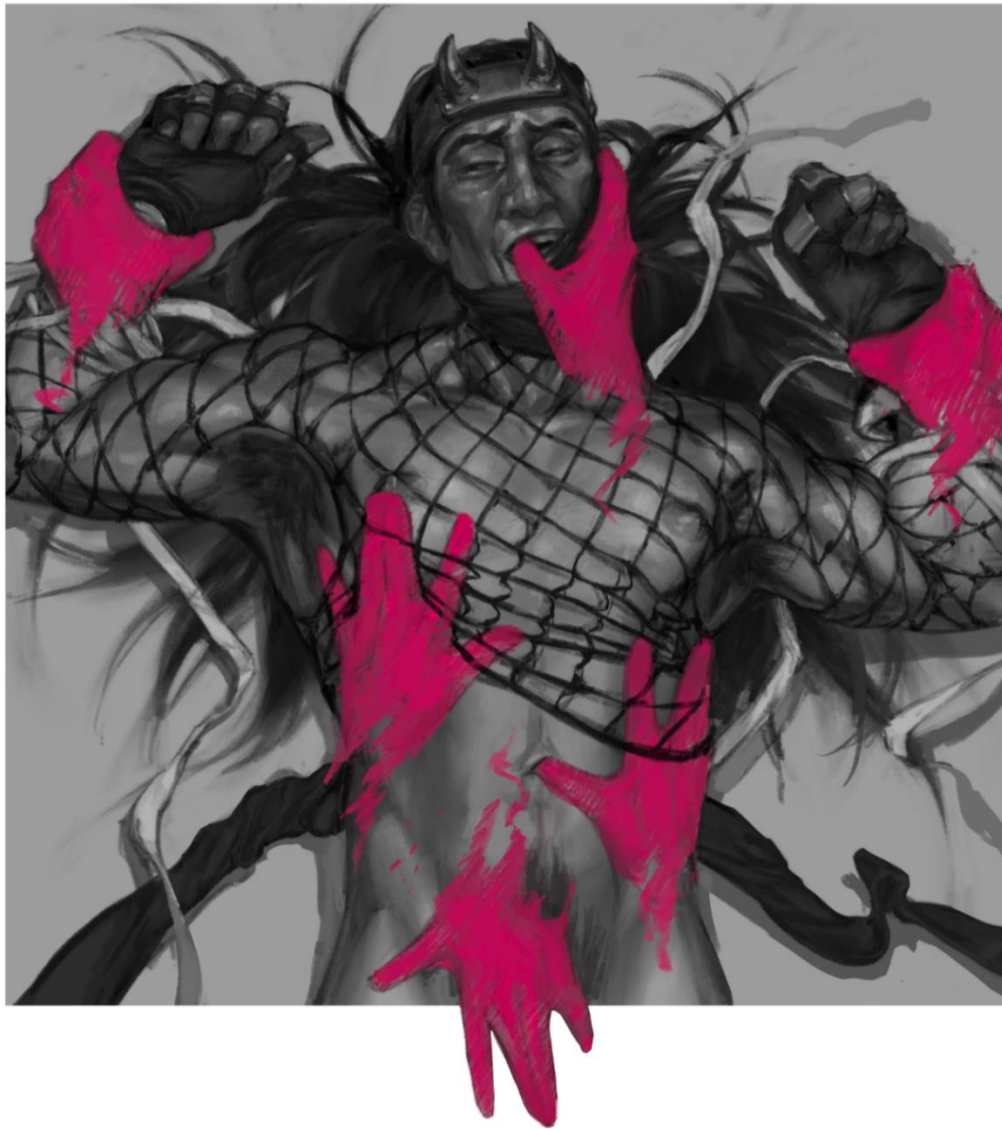




書籍制作者 amaianita

夫によるイラスト

R-18 指定

機械翻訳を使用していますので、間違いがある場合はご容赦ください。

CAUTION この本は原作・出版社とは一切関係ありません。無断転載、複製、複写、Web 上への掲載 (SNS、ネットオークション、フリマアプリ含む)は禁止です。この本が同人に理解の無い人の目に触れることを禁止します。

お読みくださりありがとうございました!

目次：

第1章 影より（ライシュロ）	3
第2章 慰めの闇（モブ×シュロ）	21

第1章 影より（ライシュロ）

トシロウは自室で、床に広げられた衣装を見つめていた。それを身に着けるのは久しぶりのことだった。島に来てからはその習慣を断っていた。普段はできない、許されないことが何でもできる幻想の世界へ逃げ込むのは、いかにも子供じみていると思ったからだ。彼は実際にその人物になりたかった——神秘的で、魅力的で、世界を体験する準備ができている人物に。しかし、そうなるうとする彼の試みはすべて無駄に終わった。トシロウは殻から抜け出すことができず、なりたい自分になることができなかった。彼は周りの人々を、パーティーメンバーを、家臣たちを羨んでいた。彼らは自分らしくいることができ、望みを叶えることができた。しかしトシロウは自分を抑制し、与えられた任務にのみ集中し、他人の気まぐれに屈服していた……

また別の仮面を被る時が来た。

まず、メッシュのシャツを着て、腰の周りにズボンを結び、すべてが適切に整列し、きちんと見えるようにした。彼は忍者の格好をしていた。家臣たちと多少似ているが、より男性的なバージョンだった。彼は彼らと同じ訓練を受けていたが、異なる道を選んだ。しかし、この変装遊びは遥か昔から始まっていた。

彼は座ってふくらはぎに包帯を巻き、ズボンを押し込んで異なる、より丸い形を作った。それには非常に大きな切り込みがあり、膝まで脚が見えるようになっていた。伝統的な袴では決してそうはならないが、彼の衣装に伝統的なところは何もなかった。トシロウがまだ忍者の訓練を受けていた頃、彼は女の子たちと一緒に過ごし、彼女たちの制服を眺めていた。それらは彼にとってずっと興味深く見えた。彼はヒエンに予備の服を着せてもらうよう懇願し、訓練場を駆け回って、何週間も姿を消しては戻ってきて、すべての任務と訓練を完璧にこなす新しい女の子のふりをしていた。すぐに彼は他の皆と話し始め、父の家の外での大冒険の話を作り上げた。当時彼はまだ高い声をしていたので、誰も疑うことはなかった。ヒエンだけが彼に目を向け、彼を着飾らせ、そんなに自己主張するよう教えた張本人として、誰も見ていない時にくすくす笑って親指を立てて見せた。

彼は上着を着て、帯で腰の周りにゆるく結び、胸の一部を露出させた。ついに声変わりした時、彼は打ちのめされた。もうヒエンの服を着て、カッコいい女の子のふりをすることはできなかった。トシロウは何週間も落ち込んでいたが、ついにヒエンが苛立ち、彼と一緒にこっそり抜け出して新しい衣装を手に入れた。それ以来、彼はほぼ毎晩町に出かけ、マイツルが尋ねた時にはカバーしてくれるよう親友に頼んだ。そしてすべてが信じられないほ

どスムーズに進んだ。彼は寝不足だったが、幸せだった。内気なペルソナから逃れて、他の誰かになることができた。成長するにつれて、ズボンのスリットはより大きくなり、シャツはより開かれ、目の中の表情はより自信に満ちたものになった。このようにして、彼は何でもできた。

トシロウはこのペルソナをクロコと名付けた。

彼はサンダル、手袋、鬼の角がついた鉢巻、そして顔の大部分を覆う仮面を身に着けた。この衣装を着ると、彼は別人のように感じた。必要なのは、いくつかの仕上げだけだった。ヒエンは化粧なしで自分を着飾ることに自信を持っていたが、完全に別人に見えるために、トシロウはベニチドリに頼った。彼は彼女が不安を隠すために化粧をする様子を観察し、同じことをすることを学んだ。彼は小さな化粧箱を取り、注意深く目に線を引き、その形をより強調した。それが人々の注意を引くことを知っていたからだ。彼は仮面の下で微笑んだ。訓練された動きで、彼は両目の下に点を描き、家の部隊の各メンバーが職業の階段を上がる際に入れる刺青を偽装した。

クロコの準備が整い、トシロウは心の奥に隠れた。彼は家臣たちが眠っている隣の部屋から来る音に耳を澄まし、人が起きている気配を感じなかった後、窓からこっそり抜け出した。

クロコは島の街の通りを歩き回り、人々の視線を感じていた。時折男性にウインクして興味深そうな目で後を追わせたが、近づきすぎると影の中に消えた。クロコは人とイチャつくことができ、そうしていた。自分が美しいことを知っていた。時折、まだ開いている屋台から店主の目の前で果物を掴み、家の階段で落ち込んでいる子供に投げてやった。クロコは、重い鎧なしに、それをするのに十分こっそりと自信を持っていた。彼は見知らぬ女性の裏庭に歩いて入り、彼女が追い払おうとすると、まつ毛をひらひらと動かし、頬にキスをして、軽々と塀を飛び越え、彼女を言葉を失わせて立ち去った。

クロコは迷惑をかけながらも、魅力的でいることができた。

彼はしばらく街を歩き回り、古い役割に再び慣れた。クロコは完全な体験を得るために、もっと人込みのある場所に行く必要があった。彼は実際に何を望んでいるのか、なぜ戻ってきたのか知っていた——手軽な一夜

限りの関係が必要だった。簡単で、面倒なことはなし。何かから、何かから心をそらすための.....まあ、これはクロコの問題ではなく、他の誰かの問題だった。

彼は知っている最寄りの酒場に向かった。そこはより、まあ、だらしない客で知られている場所でもあった。彼は仮面の下で微笑んだ。より女性的なルートを取って、ストイックな男性やより敏感な女性を探すべきか、それとも男性的なルートを取って、ずっと前に誰かと羽目を外す必要がある女の子や、マットレスに叩きつけられても構わない男を探すべきか？クロコは確信が持てなかった。最初により興味深いと思った人を選ぶしかない。

彼はバーに座り、ウインクと共に無言でビールを二杯注文した。バーテンダーはくすくす笑って仕事に取りかかった。

クロコはバーを見回し、楽しそうな人を探した。まず、短い髪のノーム族の女性に気づいた。彼女は大きな手を振り回して話をしていた。彼はノーム族のそういうところが好きだった。彼らの手は彼の首を包み込むことができそうに見えるのに、体は彼自身よりも小さいのだ。それから彼の視線は、角に立っている異常に背の高いエルフに移った。彼もまた空間を偵察していた。その細い特徴がクロコの胃の中で何かをひっくり返した。それから彼がつま先でタップしているのに気づいた。すでに誰かを待っているのだ。

「できました！」彼はバーを見て頷き、カウンターに数枚の金貨を置いた。それらを掴んでバーから離れて他の場所に座ろうと動いた時、彼の視線は信じられないほど見覚えのある金色の目と即座に出会った。ファリン？クロコは彼らが近づくと息を飲んだ。

これは彼女ではなかった。これはライオスだった。

「やあ！」彼はバーに飛び乗り、広く微笑んだ。「君は仲間が必要そうだね！」

クロコは目を細めた。共通語を話さないふりをすれば、彼は立ち去るかもしれない。しかし.....彼はビールをカウンターに戻した。

「僕の名前はライオス」彼は陽気に叫び、クロコに手を差し伸べた。

クロコは反応として鼻にしわを寄せた。ライオスの振る舞い方は信じられないほど不器用だった。彼もここでナンパしようとしているのか？もしかするとクロコは彼に教訓を与えるべきかもしれない。そうだ、そうだ！彼はライオス・トーデンとやるべきだ。皆のため、そして彼自身の身勝手な理由のためにも。クロコは彼が大きなモノを持っていることを知っていて、それを自分の両目で見て、自分の両手で触れる必要があった。彼は仮面の下で狡猾に微笑んだ。

「ノー」彼は男の目を見た。ライオスは視線をそらし、まだ手を差し出していた。

「ああ、そうか」彼は蹴られた子犬のような顔をして言った。「君と話したかっただけなんだ。君はとてもかっこよく見えるから……」ライオスは恥ずかしそうに頭を向け始め、手を下ろした。

「ノー、トーク」クロコは訛りのある話し方をした。

彼はライオスの顎を掴み、クロコの目を見るよう頭を戻した。もう一方の手はライオスの太ももにあり、筋肉が屈服するのを感じながら握っていた。彼はいつもこれをやりたかった。ライオスにノーと言い、このように彼を掴むことを。

「でも、もっと知りたかったんだ！どこから来たのか、どこでそんなかっこいい衣装を着ることができるのか……」ライオスはズボンから見える太ももを見て、明らかにその肌に魅了されていた。

彼はそれに噛みつきたそうに見えた。

クロコは目を回し、頬をより強く握り、魚のような顔をさせ、不器用に口を開けたり閉めたりしようとした。彼はそれを見て笑い、ライオスを赤面させた。

「おい、なんでそんなことするんだ！」彼はまくし立て、クロコを掴もうと手を上げたが、クロコの方が速く、両手を片手で掴んでライオスの膝の上に押し付けた。「君は一体何を……」彼は今や赤くなっていた。怒りと恥ずかしさの両方で。

「ノー、トーク。ドリンク」クロコはビールを指さした。

この男に命令するのは素晴らしい気分だった。トシロウはそれをするには弱虫すぎたから、クロコが遅れを取り戻さなければならない。彼はこの男にマナーを教えてやる。

「オーケー、オーケー。変なやつ……でも、なんで話さないんだ？ 君はとても興味深そうなのに！」

「ライオス」バーテンダーが名前でも彼に声をかけた。「どうしてそんなに鈍感なの？ 彼はあなたが理解できないのよ！」

クロコはビールとバーの後ろのグラスに入っていた木製のストローを掴んだ。仮面を上げることなく、それを通して飲むためだった。

「何？ 彼は聞こえないの？」

「いいえ、彼は共通語を知らないの」彼女は男にうんざりして目を回した。

「ああ、そうか……」ライオスはついに黙り、カップから一口飲んだ。クロコが再び彼を見た時、彼は深く考え込んでいるようで、ポニーテールから髪の毛の房をくるくる回していた。ライオスは彼を見て、眉をひそめた。「何？」

クロコは彼に微笑みかけた。主に目に見える微笑みだった。彼は獲物と遊び、追い詰め、絶望的にさせたかった。

彼は上着の周りの帯を少し緩め、少し開いて、メッシュで覆われた胸をより多く見せた。ライオスの視線が下に滑り、その光景に赤面するのが見えた。

クロコはストローを通してビールをもっと飲み、身を乗り出して、仮面を通してライオスにキスをした。彼の脳は凍りついたように見えた。

「ああ、そうか……」彼の頭の中で何かがついにクリックした。「僕は、僕はそれについて考えていなかった……」彼はつぶやき、突然トシロウを時々見るのと同じ優しい目でクロコを見た。それがクロコの胃の中で何かを後退させた。

実際にライオスと寝ることは、彼が望んでいることだったのだろうか？

「君の髪が好きだ、そして君の目もとても美しい……」ライオスは今や顔にバカな笑みを浮かべていた。クロコがあの他の男について彼が熱く語るのを聞いて、あまりにも良く知っている表情だった。もし彼がこの男が普段どれだけ迷惑かを知らなければ、それを可愛いと思ったかもしれない。しかし彼にはただ愚かに見えた。なぜ彼は突然そんなに感傷的になったのか？

クロコは胸の中で小さく跳ねた心臓のことを無視した。これは感傷的な感情の時ではなく、彼はただこの男のズボンの中に入りたかった。純粹に悪意のある理由で。

「はい、鍵よ」バーテンダーがライオスの前のテーブルにそれを投げ、くすくす笑った。

「いくら借りてるんだ、ディタ？」彼は活気づいた。この女性に感謝だ、とクロコは思った。

「サービスよ、あなたがこんなに頻繁に来てくれるから。次回はそう簡単にはいかないわよ、覚えておきなさい。」

「ありがとう！」彼は鍵を掴んだ。これはクロコの好みに合った方向に動いていた：非常に迅速に。

二人ともビールの残りを飲み干し、ライオスは彼の手袋をはめた手を掴んで、その場所の最上階に連れて行った。

「ライオス」彼は一瞬彼の注意を引いた。「マスク」彼は引き下げる動作をして、手を交差し、頭を振った。「ノー！」

「ああ、オーケー……でも君の顔が見たかった。きっととても美しいに違いない。君の目は美しい……」ライオスは物憂げに彼を見た。

「ノー、トーク」クロコは眉をひそめ、理解しないふりをした。ライオスは静かに笑い、彼の手を握った。

「分かってる、ただ君がどれだけ美しいかについて話すのが好きなんだ。君は僕の知っているある男を思い出させる」彼はつぶやき、クロコを部屋に導いた。「彼は君と同じ髪をしている。長くて絹のような。」クロコは目を回し、ベッドに座って退屈そうに見えた。

ライオスがついに彼の隣に座った時、明らかに何かもっと彼に言いたがっていたが、クロコはもう十分だった。彼はこの感傷的なでたらめをすべて聞く必要はなく、ただやりたかった。

彼は長い間ライオスに惹かれていたことを知っていた。クロコは彼の柔らかそうな筋肉、バカな笑顔と明るい目、愛するものへの情熱が好きだった。

トシロウは欲望を彼の妹に向け、彼女の注意を求めて憧れ、おとなしく彼女にデートを申し込んだ。しかしクロコは、彼がこの甘くて甘い金髪の少年を自分の上に欲しがっていて、他の誰でもないことを知っていた。

彼はトシロウがそんな臆病者であることを軽蔑していた。もし彼がライオスとやらないなら、それはクロコの仕事だった。

彼は身を乗り出し、仮面を通して彼の口にキスをした。ライオスの手は即座に彼の首の周りにあった。彼は実際に仮面に舐めるようにして、それを湿らせていた。

クロコは同じように応え、拘束を通してのこのすべての行動が心を奪うものだと感じた。彼はライオスの肉厚な太ももに手を置き、それらにもたれかかって、このキスを深めた。

ライオスは腕を締め、彼の顔を近く、あまりにも近くに持ってきた。というのも、彼はクロコの鉢巻の角に叩かれたからだ。

「これを外してくれる？」彼は指さし、額をこすった。

「ノー」彼は頭を振り、目を細めた。

ライオスはため息をついた。「きっとシュロウなら同意してくれるだろうに……」

クロコはそれに対する嫌悪感を隠さなければならなかった。もちろんトシロウは同意するだろう、彼には骨がないのだから！

「それなら、このままでやろう」ライオスは微笑み、彼をキスに引き戻した。布は今や非常に濡れていて、ちょっと気持ち悪くなっていたが、それ自体の方法で熱かった。

黒子はライオスの上にまたがり、腰を下ろした。彼はできる限りライオスに近づき、半勃起状態の自分のペニスをライオスのペニスに押し付けた。くそっ、ライオスのズボンの股間はすでに完全に勃起していて、きっと不快だっただろう。

ライオスの片方の手がズボンの脇の切り込みに入り込み、太ももを乱暴に触った。だから、黒子は主導権を握りたかった。黒子ならそういう遊びもできる。彼はキスの中でうめき声を上げ、軽く腰を動かしてライオスからうめき声を引き出した。まさにそこが黒子が必要としていた場所だった。

ライオスのもう片方の手は素早く上着を解き、肩から引き剥がした。メッシュのシャツがさらに露わになった。

彼はすぐに上着を通して黒子の胸筋を掴み、指で乳首を転がした。しばらくして、彼はキスを中断した。

黒子は激しく息を切らしながら、ためらうことなくライオスに密着していた。もう一人の男は、彼の目をじっと見つめ、彼の淫らな姿にすっかり魅了されていた。

よし。

黒子は手を下ろし、ズボンの上からライオスの太いペニスをしっかりと掴んだ。ライオスは呻き声を上げた。

「待って、私...」

黒子は再び呆れたように目を回し、立ち上がった。

「いや、つまり...」

彼はライオスの太ももを叩き、足を広げて彼の前にしゃがみ込んだ。

ありがたいことに、ライオスはすぐに黙った。黒子の姿に催眠術をかけられたようだった。

彼はゆっくりと、そして優雅にライオスのズボンの紐を解き、唇を噛んだ。どうしても試してみたかった。舌の上でその重みを感じ、芳醇な香りを吸い込みたかった。

黒子が彼のペニスをズボンから抜き、ズボンを引っ張って睾丸も取り出す間、ライオスは黙って息を切らしていた。

「くそ、すごくいい感じだ...」ライオスがそう言うと、黒子の手の中でペニスがぴくぴくと動いた。ああ、敏感なんだな、少なくともこうやって捕まった時は。

黒子は見上げ、目を大きく見開いて根元に顔を近づけた。明らかにライオスはそれほど清潔ではなく、汗の臭いがしていたが、黒子はそれでも諦めなかった。彼は潔癖症のオタクではない。

ライオスの手は黒子のポニーテールにかかっていたが、掴むのではなく指で撫でていた。

少し優しすぎるようにも思えたが、黒子は気にしなかった。代わりに、彼は自分のペニスを口に含み、ぴくぴく動くのを感じ、先走りで濡れていく亀頭を見ていた。

ライオスはうめき声をあげ、頭を後ろに倒した。

「すごくきれい...シロみたい...」黒子は立ち上がって棒で頭を殴りたくなった。どうしてまたあの男の話をしているんだろう？

ライオスを救っていたのは、本当に、本当に彼とやりたかったことだけだった。

「でも、彼は絶対に応えてくれないだろうな」彼は視線を逸らさずに呟き、呻いた。「でも、僕は本当に彼が好きだ。なんて綺麗な目をしているんだろう。時々、彼が食べているのを見て、フォークの代わりに唇が僕のペニスに伸ばされているのを想像するんだ...」

クロコはゆっくりと瞬きをして、理解したようには見せないように、気持ちを落ち着かせた。

ああ、話が展開した。

しかし、まるで別人のように自分の話を聞いているのが、彼を苛立たせていた...つまり、トシロウの話を聞いているのが。

「優しくキスして、それから喉を犯してやろうかと思ってるんだ」ライオスは微笑んで呻き声を上げた。黒子が自分の睾丸を口で舐め、ペニスが顔の上に覆いかぶさってきた。

彼は一瞬動きを止め、ライオスを撫でた。今すぐ口の中に入れたかったのだ。黒子はマスクを少し持ち上げ、ライオスのペニスの先端を中に導き、軽く吸った。

彼はそこに溜まった射精液を舐め、味見した。特別なことは何もなかったが、それでも気持ちよかった。彼はペニスを少し深く吸い込み、喉の奥まで押し込んだ。

ライオスは呻き声を上げ、黒子のポニーテールを強く掴んだ。

「俺もしてやりたい」黒子がゆっくりとペニスを喉の奥まで押し込む中、彼は息を切らして言った。「してもいいの？ 待って、どうすれば...」

黒子は彼を見上げた。ライオスは間抜けな吸うような仕草をして、喉を指差していた。笑いたかったが、口はすでに塞がっていた。

黒子は親指を立て、続いて太ももを掴んで準備を整えた。

ライオスの期待は裏切らなかった。

黒子の髪を掴み、しっかりと掴んだ。もう片方の手は背後から支えてくれた。良い体勢を見つけると、ライオスは力強く突き込み、黒子の鼻を陰毛に埋め込んだ。

黒子は喉の奥まで熱く感じ、寄り目になった。

数秒後、ライオスはついに動き出し、本格的に彼を犯し始めた。腰を素早く、浅く動かした。彼が突き返すたびに、ライオスはマスクがペニスを、そして唇を滑らせるのを感じた。黒子は吐き気を催さないようにすることだけに集中できた。

「ああ、まさにこれこそ私が求めていたもの。シュロ、あなたの唇は本当に柔らかい」彼は本当にこのロールプレイに夢中になっていたのだな。「お前の喉奥まで出してしまいたい、お前を滅茶苦茶にしたいんだ...いつもはきちんとしているのに、少しは羽目を外したいか？」

ライオスは特に激しく突き上げ、黒子は激しく嘔吐し、目をぎゅっと閉じた。涙がこみ上げてきた。メイクが落ち、頬を伝うのを感じた。

ライオスは口を開けたまま彼を見つめた。興奮のあまり、明らかに頭が回らないようだった。「クソッ、泣くと可愛いな...」

ライオスは突きをどんどん速くし、黒子の喉を生々しく犯した。動きはどんどん深くなり、ほとんど引き抜いては、もう無理だと押し戻す。

黒子の目はさらに涙で潤み、ライオスの太ももに手を添えた手は震えた。

「クソッ、シュロ、愛してる」ライオスは呻きながら、最後にもう一度黒子の頭を押し下げ、喉奥まで出し入れした。

黒子はめまいがした。

ライオスが腹に精液をぶちまけながら、この馬鹿野郎への愛を告白するのを聞かされるのは、本当に嫌だった。もちろん、中身のせいで胃がひっくり返るのを感じていた。

ライオスは息を荒くしながら、ようやく引き抜いた。まだ勃起していた。これはなかなかのものだ。

黒子はマスクを首筋まで下ろし、丁寧に目尻を拭った。ライオスの鋭い視線を感じ、見上げ返した。

「あら、ごめん。本当にごめんなさい...」

黒子はため息をつき、立ち上がり、服を軽く叩いた。確かに、こんなひどいことをするのは嫌だったが、彼はそれがとても好きだった。こんな風に扱われるのは好きだったし、恥ずかしいとも思わなかった。彼は腰に手を当て、ライオスを見た。

「あら、すごい」ライオスの視線は顔から、開いた上着へと移り、胸元と、タイトなメッシュで覆われた引き締まった腹部を見つめた。

それから彼はさらに下の方を見やった。パンツの中で張り詰めている黒子のペニス。その光景に、彼は鼻歌を歌い、唇を舐めた。

黒子は反応する暇もなかった。ライオスの腕がパンツの切り抜きの中に入り込み、尻を乱暴に掴み、自分の方へ引っ張ってきたのだ。

黒子はよろめき、ぶつぶつ言いながら彼の肩を掴んだ。

ライオスは泣きじゃくるペニスを無視し、下着を押し分け、尻の頬を引っ張ることに集中した。

黒子は目を見開いた。苛立ちを感じていた。

「やめて。」

彼はライオスの肩を乱暴に殴り、ライオスは「痛っ!」と痛々しく呻き、尻から手を離れた。

「どうして? 好きだと思ってたのに...」

「ベッド」黒子は呟き、ライオスを仰向けに押し倒してその上に座り、尻をペニスに押し付けた。

今すぐ必要だった。ライオスにそんな馬鹿な真似はやめてほしい。ライオスに犯されて、頭が真っ白になるのが嫌だった。

黒子はこの男の指を尻に近づけるわけにはいかなかった。遅すぎる。雑すぎる。自分でやるしかない。

ライオスはそんな扱いに呻き、目を伏せて黒子を見つめ、腰を黒子の少し下に向けて動かした。

黒子の腹に手を置きながら、ライオスは小さく呟いた。「ああ、お前は強いな.....片手で俺の両手を掴んで、ここに閉じ込められるのか.....」

黒子は彼の喋りを無視した。結局のところ、彼にはよく理解できていなかった。彼はライオスの口を手で覆い、強く押し下げて、彼を黙らせた。男のすすり泣く声が聞こえ、腰が震えるのを感じた。

ああ、彼はそういうのが好きなんだ。

空いている手でクロコはズボンを緩め、各部屋に備え付けられているナイトスタンドのオイルボトルを掴んだ。ディタは本当に自分の受け手をよく分かっていた。彼はそれを数回ポンプし、ライオスの体から体を起こした。接触がなくなったことで男は呻き声をあげ、ゆっくりと指で自分を弄り始めた。

クロコが最後にこれをしたのは、まだワにいた頃だった。見知らぬ男のベッドに横たわり、彼の下に横たわり、できる限りの速さで弄んでいた。

男がひどく焦り、マスクを剥がそうと脅していたため、彼はあまり深くは開かず、焦っていた。

挿入自体はそれほど痛くなかった。相手はそれほど豊満な体ではなかったからだ。しかし、あの出来事は彼に強い嫌悪感を残した。

クロコはこれがうまくいくことを望んでいた。ここで主導権を握る必要があった。

彼は自分の指を二本入れ、ゆっくりとはさみ、息を切らしながら、マスクがさらに湿ってベタベタするのを感じた。黒子は再び指を伸ばし、震えながらさらに奥へ押し込んだ。

ライオスは彼の下から空気を突き上げ、摩擦を追っていた。黒子は唾液が自分の手から滴り落ちるのを感じた。ライオスの片方の手はまだ黒子の腹にあり、もう片方の手は再び裂け目から太ももを撫でていた。

黒子は手が滑り落ち、ついにペニスに近づいた時、唇を噛んだが、すぐに上がってしまい、彼は満足できなかった。彼は鼻の下で静かに悪態をつき、指を特に強く押し込んだ。もっと欲しかった。

黒子はもう一本の指を加え、耐えられる限りのオイルを塗って馴染ませた。快感が高まってきた。彼は目をぎゅっと閉じ、指が完全に入った時にうめき声を上げ、ライオスを掴んでいた力が弱まった。

その時、ライオスは彼の手を掴み、口から引き抜いた。「くそっ、やっと自由になった！クソ野郎」と最後の部分を呟き、黒子の手を背中に回した。

黒子は驚きで目を見開いたが、指はまだ深く挿入されていた。

ライオスは起き上がり、男を仰向けに倒し、すぐにうつ伏せに倒した。

ああ、黒子の強さを褒めていたのに、こんなに簡単に圧倒できたのか？

「くそっ、美味しそうだな。早く中に出しちゃいたいな」ライオスはうめき声を上げ、黒子の手を掴んでゆっくりと指を引き抜いた。黒子はぶつぶつと呟き、足を蹴り返した。ライオスはかろうじてそれを避け、すぐに尻を叩いた。「やめろ！」

「だめだ」

「わかった。じゃあ、お前がやらないなら俺が行く」ライオスは黒子の頭を無理やり横に傾け、自分の方を指差して、それからドアを指差した。「やめろ！」

黒子は息を切らし、顔を枕に戻し、従順に尻を突き出した。念のため、両手を背中に組んだ。ライオスはそれを聞いて小さくうめき声を上げた。よかった。

「お前って本当に意地悪な女なのに、すごくエロいな...マナーとセックスアピールは両立できないんだな」ライオスは再び尻を叩き、クロコは興奮して背中を反らせた。

くそ、これってすごく服従的な気分になる。

ライオスの手は再びクロコの尻に当てられ、それを広げ、親指でぬるぬるした穴をなぞった。「ああ、いい仕事してるな...」

ライオスがオイルをたっぷりと塗り込むぬるぬるした音が聞こえ、先端が入り口に押し付けられるのを感じた。

ライオスは挿入しようとしたが、クロコの尻の間を滑って擦れ、期待に震えた。

何度か試みた後、ついに先端が挿入され、二人とも喘いだ。ライオスは黒子の両脇に両手を回し、胸と背中が触れ合うほどにゆっくりと、苦痛に耐えながら押し込んでいた。

「クソッ、お前は俺にこんなことをさせられているのか」黒子の耳元で呻き、男は震えた。「お前はこんなにも強くて、俺のために腹ばいになってくれている。いい子ちゃんだ」

黒子は彼を蹴飛ばしたい衝動に駆られたが、胸にこみ上げてくる感情を抑えきれなかった。彼は枕に顔を押し付け、うめき声を上げた。

ライオスは押し込み続け、ついに自分の腰が黒子の腰とぴったり重なるまで押し込んだ。彼は臆面もなくうめき声を上げ、黒子の肩を強く噛んだ。痛みがこみ上げ、網目が裂けるのを感じた。

黒子は痛みで背中を反らせ、うめき声を上げた。「お前には、こんなにたくさんのことができるんだ.....」ライオスはついに手を離し、少し体勢を立て直した。手はクロコの髪に絡まり、まるで鎖のように手首に巻きついた。彼はそれを乱暴に引っ張り、枕から頭を、ベッドから胸を引き離した。

「ずっとシュロにこうしてあげたかった。こうさせたいんだ」彼はクロコに調整する暇を与えず、腰を素早く、浅く動かし始めた。

殴られても呻き声しか出なかった。

彼はまたあの弱虫の話をしていて、それが黒子をさらに興奮させていた。「あいつをめちゃくちゃにしたい。正気を失うまで犯してやりたい」彼は息を切らしながら、何度も何度も突き入れ、そしてまた突き入れた。黒子のペニスが彼の股間で上下に揺れ、まだ巻かれたままの下着に擦れ、この状況での唯一の安らぎだった。

突然、彼の頭は再び枕に押し付けられ、顔が枕に押し付けられて息が苦しくなった。

「彼を自分のものにしたい。クソッ、私は…」

黒子は自分の中のペニスがピクピクと動くのを感じた。その考えはライオスを明らかに抑えきれないほどの興奮で満たしていた。

「お腹が膨らむくらい精液を注ぎ込みたい」

黒子は既に酸素不足で斜視になっていたが、さらにこんなことが起きた。触れられていないペニスから大量の先走りが漏れ出し、彼は恍惚とした気分になった。

「彼をうまく種付けしたいんだ、妊娠させたいんだ。」

彼の突きは刻一刻と乱れ、速度を増し、黒子を突き上げ、男を吹き飛ばし、何度もヘッドボードに角をぶつけた。

「彼を結びつけないで、私のペニスで生きてほしいんだ。」

黒子は動くたびに呻き声を上げ、絶え間なく震えていた。

彼は滴り落ちていた。彼はただ今すぐにでもイキたかったが、ライオスは興味を示さず、明らかに自分のためにやっているようだった。情けない心を閉ざした男について、くだらないことを言うことに夢中になっていた。

「クソッ、愛してる、ただ彼が必要なんだ…」

彼はほとんど泣き言を言っているようだった。ライオスは素早く突き上げ、彼の最奥へと突き入れた。

黒子は息を切らし、体が硬直し始めた。その時、ライオスはついに達し、彼の頭を離した。

やった、これで彼は両端から満たされた。裏切り者の彼のペニスは、その考えに痙攣し、先走りの川を滴らせた。

ライオスは彼の背中に覆いかぶさり、柔らかくなり始めたペニスはまだ中に入っていた。彼は黒子の肌に小さく優しく噛みつき、くすぐったいだけを感じていた。

黒子はもう我慢できなかった。

「イク」彼は肩をすくめ、ライオスが聞いてくれることを願って呟いた。

彼は聞いてくれ、小さく悲しげなため息をつきながら引き抜いた。

黒子はこの演技には全く興味がなく、ただついに絶頂を迎えたかっただけだった。ライオスには、快楽とトシロウへの妄想を追い求めるのではなく、もっと注意深く聞いてほしいと思っていた。

黒子は彼の背中に転がり込み、ズボンを脱ぎ捨て、禪を解いた。ライオスの顔が急に恥ずかしさで赤くなった。

「あ、あの... 普段は、あ、私がやってイク人...」

黒子の目はピクツとも動かなかった。ライオスはすっかり自信過剰になっていた。

「あ。あの、してもいいかな」彼の目は自分の穴に注がれ、そこから精液が漏れ出ているのを見ていた。

彼は黒子の顔を見て、滴る入り口を指差して舐める仕草をした。

黒子はしばらく目を閉じなければならなかった。これは死ぬぞ。

彼は頷いた。

「最高！」

ライオスはうつ伏せになり、さらに近づいた。彼は黒子の両足を肩越しに引き寄せ、優しく唇を舐めた。

黒子は既にマスクの中で息切れしており、この出来事に緊張していた。

ライオスは緩んだ入り口に唇を当て、ゆっくりと自分の精液を舐め上げ、飲み込んだ。

黒子の頭が少しくらした。

それからライオスは舌を這わせ、片方の手を黒子のペニスに回し、濡れた舌をゆっくりと広げながら引っ張った。

黒子は目を閉じ、ライオスの頭に手を置いたまま、うめき声を上げていた。

ライオスは舌で黒子を犯し始め、できる限り奥まで入れた。激しく舌を動かし、前立腺を少しだけ押し当てながら、ペニスを速く動かした。

彼は黒子を見上げた。

彼はすでに震えていた。一晩中刺激を受け続け、解放されることはなかった。

ついに彼が絶頂を迎えたのは、ライオスの熱い視線を捉えた時だった。

彼は大きく息を呑み、ライオスの手の上に精液をこぼした。彼は目をぐるりと回しながらうめき声を上げた。ライオスは何も考えずにそれを優しく舐め始めた。

「ありがとう！」

彼は黒子の好みにはあまりにも元気すぎた。

「また会えるといいな...ここでも？ めちゃくちゃ暑かったし...」

ライオスは黒子の両手を掴み、子犬のような目をした。

黒子はライオスの視線を避けた。

「来週、ここで会おうか？」ライオスは二組の足を互いに近づけるようにして下を向き、それから七本の指を立てた。

黒子は鼻で笑った。

まあ、それは確かに試みだった。

「わかった」黒子は目で笑って言った。「行くわ」

ライオスは頷くと、黒子はベッドから体を解き、素早く服を結び直して、しわくちゃにした。

「いい感じだ」ライオスはそう言って親指を立てた。

黒子は呆れて窓辺へ行き、堂々とそこから出て行った。

彼は急いで家に戻った。翌日もまだやることがあった。

パーティはダンジョンの入り口で集合していた。

いつものように、トシロウが真っ先にそこにいた。

彼は気分が最悪で、お尻は痛く、十分な睡眠も取れていない。鎧の下には虫刺されの跡がひどく刺さっていた。

彼は顔をしかめながら、片足からもう片方の足へと歩みを進めた。

これはまずい。

しばらくして、ライオスが元気そうに現れた。

「おはよう、シュロ！」ライオスはシュロに手を振ったが、疲れた様子に気づき、「ああ、大丈夫か？」と尋ねた。

「ああ、ライオス。ただ、あまりよく眠れなかったんだ...」

「ああ、なるほど！ まあ、俺もだ」ライオスは肩をすくめた。「でも、いい夜だったよ！ カッコいい奴に会ったんだ...でも、みんなに伝えたいんだ。忍者だったんだけど、すごくカッコよかったんだ...」彼はうっとりと微笑んだ。

トシロウはため息をつき、視線をそらして無表情を保った。皆が集まったら、ライオスの口から自分の過去の出来事を聞かされることになるだろう。

彼はすでに自分の無謀さを後悔していた。

第2章 慰めの闇（モブ×シュロ）

「あれは誰だ？」

時刻は遅く、門の明滅する灯りはあまり照らしておらず、遠くで蟬の羽音だけが聞こえていた。しかし番兵たちは、小道を一人歩く黒装束の人影をまだ見ることができた。

「さあな。」

「でも、あいつの格好は俺たちと似てるが…」

「そうでもない。あまりにも風変わりだ。鬼の角を真似してる奴なんて見たことがない。」

「確かに…それに袴の切り込みも。俺たちには許されないだろう。女子なら別だが？」

「それでも、実用的じゃない。」

二人は持ち場を守り、その人影が小道を登ってくるのを待っていた。一步ごとにわずかによろめいており、明らかに酔っていた。近づくにつれ、ようやくその顔がはっきりと見えてきた。

「…なんか俊郎坊ちゃんに似てないか？」

「冗談だろう？」

「ああ、でもあの方はとてもいい人だから、厄介なことに巻き込まれないといいが…」

小道の男はさらに近づいてきた。数歩で二人の番兵の前に立ち、仮面の下に表情の大部分は隠されていたが、鋭くわずかに赤らんだ目がその苛立ちを裏切っていた。目の周りの黒い化粧は滲んでおり、下の二つの点も同様だった。そして顔に広がる紅潮は、明らかに酔いによるもので、まったく隠されていなかった。

顔を覆っていても、彼らはこの美しい面差しをあまりにもよく知っていた——本当に彼だったのだ。

ああ」番兵の一人がやや緊張した沈黙を破った。「何かお手伝いできることはございますか？ 少し体調が悪そうですが、坊ちゃん！」

手袋をした手を彼の肩に置こうとしたとき、即座に払いのけられた。酔った状態でも反応速度に問題はなかった。

俺はお前の坊ちゃんじゃない」彼は眉をひそめて答えた。

俊郎はメリニから帰還して以来、調子が良くなかった。

彼の冒険譚は気難しい父親を少しも感動させなかったが、跡継ぎの称号を完全に拒絶される代わりに、待つように言われた。二人の弟がワに帰還するまで待つように、なぜなら彼らの話を聞くのも当然公平だからと。

この旅の全て、この戦いの全てが無駄だった。何も変わらなかった。俊郎がこの結果を予想していなかったわけではない。正直に言えば、むしろそれを望んでいた。彼は本当は跡継ぎになりたくなかったし、この家の事業を続けたくなかった。その内情を例外的によく知っていたし、使用人たちの頭に訓練が何を植え付けるかも知っていた。メリニで冒険していた時、友人たちに自分の家族が何をしているかを言及するのさえ恥ずかしかった。

いや、本当に傷ついたのは反応だった。父親がしたことといえば、眉を上げ、肩をすくめ、苦笑いしただけだった。

「しかし、この話は本当はお前のものではないだろう？ それでも興味深いがな。」

そもそも家に帰る意味はあったのか？ また馬鹿にされるために？

俊郎はメリニ以前の生活に戻った。家業に関する仕事、終わりのない訓練、家族に囲まれた緊張した食事。誰もが彼が次の当主にならないことを知っているにも関わらず、彼は自分の立場のせいで孤立感を感じていた。

この馴染みのある孤独は重苦しく、震える肩に重くのしかかっていた。彼は本当に友達を恋しく思っていた。

彼はいいものにあまりにも早く慣れすぎた。

認めなければならなかったが、彼はライオスを最も恋しく思っていた。二人の間に起こったことを考えれば、全くそうは思わないだろうと思っていたが、実際はそうだった。

おそらく黒子のせいだった。

メリニにいる間、酒場での最初の夜以来、黒子はライオスと何度もデートをし、関係を重ねた。彼は少しずつ共通語を学ぶふりをし、ライオスにベッドで彼をシュローと呼ぶのをやめさせ（時々まだ口をついて出ることがあったが）、二人の間のこの関係を最大限に楽しんだ。彼はトーデンと本当のつながりを持っていた。実際の俊郎が夢見ることができるよりもはるかに多くの。負け犬に対する黒子のまたもやの勝利だった。

しかし今、俊郎はその結果を背負っていた。彼は足を引きずりながら故郷で一人寂しく生活を続けなければならなかった。ライオスの腕の中での暖かい夜も、彼との心の広い魅力的な会話も、明るく笑う彼の貪欲な手を仮面から払いのけることもなかった。すべてが水のように指の間を通り抜け、再び海に混じってしまった。すべては俊郎がマイツルに、新しい国に留まり古い故郷から離れてこの生活を続けたいと言うことができなかったからだった。

俊郎は自分の精神状態を改善できなかったのも、再び黒子の勇敢な仮面を被らなければならなかった。楽しむことができ、自由で、無頓着で、この憂鬱から彼を振り払うことができる仮面を。

番兵たちは互いを見合わせ、その目と寄せられた眉に明らかな心配を浮かべていた。彼らは俊郎坊ちゃんが最近あまり調子が良くないことを見て取れたが、これは憂鬱の真っ只中にあっても確実に異常なことだった。

「通してくれ」彼はぶっくらぼうに言い、一歩近づこうとしたが、酔った朦朧状態で自分の足につまずいた。幸い、番兵たちがすぐに彼を支えた。

「お部屋までお連れしましょう、坊ち—」

彼はすぐに彼らの腕から身をよじって逃れようとし、さらに強く支えられると苛立ってうめいた。

「俺はお前らの坊ちゃんじゃないと言っただろう！ あいつみたいに助けは必要ない！」

背の高い方の番兵はため息をつき、軽く首を振った。

「本当ですか？ でもこんなによろめいているのに」もう一人の番兵が門を開けるために手を離すと、彼はその男をきちんと立たせたが、まだ肩を支えていた。「では、何とお呼びすればよろしいですか？」

「黒子だ、俺を黒子と呼べ！」

「わかりました、黒子ちゃん」彼は彼を案内し、もう一人の男が小道で彼らの後に続いた。その表情は隠されていても面白がっているようだった。「申し訳ございません、本当に我らの坊ちゃんとそっくりで。」

黒子は息を荒く吐き出し、部屋まで歩かせてもらった。彼はこのように甘やかされるのが本当に嫌いだった—これは俊郎に絶えず起こることで、今度は彼にも起こっている。正直に言えば、これは屈辱的だった。

彼は俊郎が絶え間ない心配を嫌っていることを知っていたが、彼を不快にさせる他のことと同様に、それを外に表さないだけだった。なぜ黒子がそれを許しているのか、彼にはよくわからなかった。おそらく血流中のアルコールが彼を穏やかにしているのだろう。

歩きながら、彼は今夜のことを考えた。彼は明確に楽しむ目的で出かけた。酔っ払い、踊り、瑞々しい蜜柑を盗む。そしていい相手と寝る。

彼が達成できたのはアルコールだけだった。あの酒場でライオスとよく分け合ったように、ビールの方が良かっただろう。代わりに、ワインを飲み過ぎて、テーブルから頭を上げることさえできなかった。これは家に帰るべき明確なサインだったので、長い 30 分後、彼は身を引かずって出てきた。こんなに酔っ払った男と誰が踊りたがるだろうか！ 彼はまっすぐ歩くことさえ辛うじてだった。ましてや、そんな相手と寝たいと思う人がいるだろうか！

番兵の温かい手袋をした手のひらが彼の腰に滑り落ちた。その新しい位置が彼を赤面させたとしても、それは安定感を与えた。彼はため息をつき、その男に少し寄りかかった。それに対して相手の指が一瞬だけ少し強く握った。ぼやけた視界の中で、もう一人の番兵がいくつかの扉を叩いて人々を起こしているのが見えた。うっとうしい。黒子は自分が彼らの坊ちゃんではないと言ったのに、なぜこんな騒ぎを起こしているのか？

ついに彼の小さな離れに着くと、二人の家臣がそこから出てきて、来た時と同じように静かに去る準備をしていた。黒子が大きくうなり声を上げると、彼らは立ち止まった。二人とも彼に深く頭を下げた。

「お邪魔してすみません、坊ちゃん！」そのうちの一人が始めた。頭の後ろを掻き、目を閉じて、家族の領地内にいるため仮面を外してごくちかく微笑んでいた。「ベッドを整えて、食べ物をお持ちいただけます、もしかしたら—」

「くそったれ！」黒子は支えている男から身を押し離し、二人に向かって数歩近づいた。彼らは彼の悪態に即座にその場で凍りついた。「俺はお前らの愛しい坊ちゃんじゃない、わかったか？」

家臣は言葉を飲み込み、ゆっくりとうなずいた。黒子は鼻を鳴らし、部屋の入り口に向き直った。

坊ちゃん、坊ちゃん...いつも俊郎のことばかり！なぜそんなに奴を気に入っているんだ？！奴が何か特別なことをしてやったことがあるか？！奴がしたことといえば、像のように突っ立って、発育不良で同時に彼らを見下ろしてただけだ。父親が彼らに命令を下す時はいつも目をそらし、腕の長さの距離に彼らを置いていた。背骨は弱く、欲しいものを手に入れることもできず、感情をコントロールすることもままならなかった。それがそんなに賞賛する男なのか？！もし勇気があったなら、奴は男ではなく、いつも泣きそうになっている小さな姫君だと認めていただろう。

黒子がさっき無礼に叱りつけた家臣を振り返ると、ふと思いが浮かんた。彼は俊郎がこの人たちに決して与えることのできないものを知っていた。そしてそれは失敗した夜遊びをずっと良いものにするだろう。

彼の態度が突然変わり、きつい仮面の下でにやりと笑った。彼は振り返り、男の肩に片手を、それからもう片方の手を置き、自分を引き寄せた。家臣は自分の上司と考える相手との突然の親密さに身を硬くした。

「坊—」

「しーっ」黒子は彼の耳にささやき、さらに近づいて胸と胸を合わせ、硬直した男の首の後ろで腕を組んだ。「お前とお前の仲間たち全員で俺を試してみないか？」

彼は静かに話し、他の三人の男を振り返ると、その目はすぐに作り物の欲情で重いまぶたになった。

「俺の部屋に一緒に来い」彼は少し離れ、帯に手をかけてゆっくりと解き、上に着ていた上着を開いた。「お前らの坊ちゃんはそんなことはしてくれない。だが俺はできる。」

黒子が上着を地面に落とし、メッシュの下着だけになって、月光で青白い胴体全体を見せると、男たちはゆっくりとまばたきをした。彼らが呆然と立っている間、彼は目の前の家臣に振り返り、再び見上げた。

「断るのか？」彼はつぶやき、手のひらを男の股間に滑らせ、明らかな勃起を軽く握った。男は息を呑み、首を振った。その目の表情は渴望でくらくらしていた。

彼は他の忍者たちとそれについて話し合ったことがあった。坊ちゃんがどんなに素晴らしいか、彼を抱きしめ、キスをし、汚すことがどんなに甘美だろうかということ。しかしそれがどれほど達成不可能な幻想かということも。だがここに彼がいて、精巧なレースの縁取りのついた皿の上で自分を差し出している。どうして断ることができるだろうか？このような状況では、彼が自分の従者であることを除いても、断ることはできなかった。

「よろしい」黒子は歌うような甘い口調で言った。彼は男の体から離れ、手はまだ股間に置いたまま、少し振り返って他の三人に見せた。「俺と一緒に来るだろう？きっと楽しいぞ。」

男たちは応えてうなずき、顔は真っ赤で、暗闇でもその色は全く隠されていなかった。

小さな寝室の空気は熱く重く漂い、五人の男の息遣いがすでにしばらく混じり合っていた。もしこの情事がそれほど秘密でなければ、障子を開けて新鮮な夜の空気を入れただろう。しかし彼らはこれを抑え、隠しておかなければならなかった。坊ちゃんからのこの貴重な贈り物は四人だけのものだった。

黒子は、服の大部分とは違って仮面と鉢巻きはまだつけたまま、布団の上に膝をつき、目の前の男の覆われた股間に顔を寄せた―最初に部屋まで彼を助けた背の高い番兵で、部屋でまだ服を着ている唯一の人物だった。顔を覆っていても、黒子の表情がわずかに嘲笑的であることが見て取れた。まるで自分の行動で何かの主張を証明しているかのように。

番兵は舌を噛んだ。彼は本当にもう黒子の口に自分のものを入れたかった。フェラチオの満足が欲しいからではなく、彼を黙らせて、抗議なしに本当の称号と名前呼びたかったからだ。

彼は一瞬黒子の髪を優しく撫でた後、指をポニーテールの根元で丸め、彼をより強く自分の膨らみに押し付けた。男の目は見開き、高慢な態度は一瞬で消えた。

「黒子ちゃん」彼は優しくつぶやき、その表情を注意深く見つめた。黒子はただ鼻を鳴らし、彼から身を引いた。仮面の下で口を開け、何層もの布越しに番兵のものに押し当てた。それでも熱さは焼けるようで、その湿り気が染み込んでくるのを感じることができた。「はあ、本当にいい子だな。坊ちゃんが俺たちに優しいのと同じように...」

黒子は眉をひそめ、再び身を引こうとしたが、男は再び黒子の顔を股間に押し付け、小さく呻いた。黒子は抵抗しようとした。手袋をはめた手のひらが衛兵の太ももに触れたが、すぐに目を見開き、指をズボンの生地に押し込んだ。

「わあ、ああ、本当に淫乱だな」家臣の一人が、男の股間を真正面から見つめ、三本の指を軽々と挿入した。黒子が外出前に時間をかけて準備していたからだ。ライオス以外の男との過去の経験で、男の焦りを身をもって知っていたのだ。男が指を曲げると、黒子は喉の奥からうめき声を上げた。男は指を曲げ、ペニスがぴくぴくと動き、布団に滴り落ちるのを感じた。「坊っちゃんって暇な時に何してるんだろう...」

黒子は息を吐き、目を閉じた。本当に、うまくいかないものね。どうして周りの人はトシロウ気にするんだろう？弱々しくて、うっとうしくて、リーダーとして失格なんじゃないか？彼はゆっくりと息を吐き出した。声も出せず、マスク越しに鼻につくムスクの香りに唾液が垂れてくるだけだった。

後ろの男は待ちきれず、服が波打つと、指ではなくペニスがしつこく押し付けてきた。黒子は息を呑み、ペニスが深く入ってくるのに合わせて背中を反らせた。体に残った綱目が、魅惑的に張り詰めた背筋を際立たせていた。

「黒子ちゃんはこんなにも美しいんだ。うちの坊ちゃんが毎日そうしているように」もう一人の番兵が彼の横に座り、広い手のひらをすぐに背中に当て、尾骨を優しく叩いた。黒子は不満げな声を漏らしたが、その感触が心地よくて体が震えた。男のもう片方の手が彼の体の下に潜り込み、無作法に胸をまさぐり、綱目が黒子の肌と乳首に食い込んだ。彼はうめき声をあげ、再び目を閉じた。

もし自分があのようにバラバラにされることを申し出なかったら、とっくに奴らの手を叩き落としていただろう。嫌がるからではなく、自分の顔が細すぎて、そんな扱いを受けられないからだ――

待て、これは黒子が普段考えていることとは違う。それはまた黒子の心の奥底にいたトシロウの姿だった。黒子は何かが入った時は、それを許し、促し、全力で歓迎し、それ以上のことをする。そこで彼は手を持ち上げ、衛兵の手のひらを胸にさらに強く押し付けた。理解を示すようにハミングを発し、指を力強く突き込んだ。

背後で家臣の腰がようやく動き始めた。短くも力強い突きだ。黒子はうめき声をあげ、すぐに目を白黒させた。彼のペニスは無視され、彼の下の布団に滴り落ち、男たちが彼のために用意したシーツを汚した。

突然、頭が押しのけられ、呻き声は彼が望むよりもはるかに大きな声で響いた。彼は息を呑み、両腕を突き出して崩れ落ち、後ろの男がゆっくりと、しかし確実に声を大きくしていくにつれて、尻を高く上げた。

「黒子ちゃんって本当に敏感なんだな」部屋に残っていた最後の男がようやく近づき、彼の反対側に座った。「最初は強そうに見えたけど、実際は坊ちゃんと同じなんだな…」黒子はうめき声を上げて家臣の方へ顔を向けた。胸を突き上げられ、触られたせいで、彼の目には涙が少し浮かんでいた。

「坊ちゃんの話はもういい加減にしてくれ。構わない。俺は坊ちゃんじゃない。俺がいる間は、そんなに褒めないでくれ」と、彼は息を切らしながら言い、開いていた膝を再び閉じた。角度が調整されたことで、彼はうめき声を上げた。

「褒め言葉だと思って受け取ってくれ」と、家臣の手が黒子の漏れ出るペニスに伸び、握りしめ、慎重に動かした。

「ん、だったら褒めてやるよ、黒子ではなく」と、男は泣き言を言った。男がゆっくりと手コキを始めると、太ももが震えた。両手でシーツを掴んだ。「お願い、サトシさん、トシロのことなんてどうでもいいんです。ただ…」

自分の呻き声で言葉が途切れた。男たちは顔を見合わせた。この男はあまりにも目立ちすぎている！知らないふりをしながら、あるいは坊ちゃんではないふりをしながら、名前を言い始めるとは。これはまずい。

「わかった、坊ちゃんじゃない」と、背の高い家臣は突然、再び彼の髪を掴み、引き上げた。トシロは喜んで立ち上がったが、両手はシーツをぎゅっと握りしめたまま、まるで猫が爪を思いっきり食い込ませるかのよう。

男のペニスが顔面に突きつけられた。番兵が黒子のマスクを引っ張ろうと手を伸ばした瞬間、黒子は残りの力を振り絞ってその手を払いのけた。

「マスクを着けたままできる」彼はそう言って顔を上げて、マスクのすぐ下、マスクの根元に鼻を押し付けた。その胴回りが彼の美しい顔に落ちた。彼は息を吸い込み、目を閉じた。マスク越しに匂いは和らぎ、黒子はそれが今回の場合は良かったと思った。きっとトシロウ好きの汗なんて、そんなにいい匂いじゃないだろう。

彼はマスク越しにそれを口に含み、唾でさらに濡らした。番兵は小さくうめき声を上げ、ポニーテールの根元に手を置き、指の間を撫でた。黒子は感謝の気持ちを込めてハミングしたが、その穏やかな声はすぐにうなり声で遮られた。後ろの番兵が激しく突き上げたのだ。

「ハルさん」彼はまた息を切らして呟いた。まるで話の筋が狂い、名前を知らないはずがないことをすっかり忘れていた。「お願い、優しくして、あ…」

ところが、背後にいた家臣のハルが黒子の胴体をぎゅっと抱きしめ、顔を首筋に押し付け、そのまま腰を突き上げ始めた。黒子はシーツをさらに強く握りしめ、突き入れられるたびに呻き声をあげ、息を切らした。声も出せず、頬は目の前の衛兵の太ももに押し付けられていた。

「坊っちゃんが私の名前を覚えていてくれて本当に光栄です」彼は黒子の耳元で囁き、その後、耳元で優しく囁んだ。「坊っちゃんは本当に私たちに気を配ってくれて優しい。お父さんとは違って…」

もし彼がもう少しゆっくりと彼を犯していたら、黒子はまた「坊っちゃん」と呼ばれていることを口にしたらろう。しかし、彼はただ目を閉じ、満足げな呻き声を押殺し、目の前の番兵の脚に嬉しそうな表情を隠した。

しかし、男はそれでは満足しなかった。彼は再びクロコを引き離し、自分のペニスを彼の顔に押し付けた。男は呻き声を上げた。

「坊っちゃんも私の名前を覚えてる？」と、彼は優しく、かすれた声で言った。「それは嬉しいけど、もっと口に入れて欲しい...お願いできますか？」

「はい、アキラさん」黒子は息を切らしながら言った。まだマスクを手放したくなかったので、震える手でマスクを持ち上げ、よだれを垂らしたふかふかの先端を口に滑り込ませた。

「坊っちゃんは本当に優しすぎる」番兵は腰を前に出した。黒子はそれをチャンピオンのように受け止めた。喉に詰まる前に喉に詰まったため、涙が溢れそうになったが。彼はマスクを放し、アキラの腰を掴み、さらに前に進み出て、一気に喉に詰め込んだ。番兵は親指で丁寧に涙を拭った。「泣かないで。そんなに泣きじゃくるなんて、私たちも耐えられないでしょ...」

この優しさは、黒子が鼻呼吸に慣れるまで続いた。それから男たちは皆、始めたことを続けた。一人は彼の胸をまさぐり、乳首を引っ張り、一人は強く握りしめながらリズムカルに股間を撫で、一人は後ろから腰を突き上げ、耳元で喘ぎ、一人は喉奥まで突き込み、甘く濡れた声に耳を傾けていた。

そして黒子が耳元で聞いたのは、彼らの「坊っちゃん」という呻き声だけだった。

「坊っちゃん、すごく上手に受け止めるんだ...」

「坊っちゃんのチンポ、すごく濡れて綺麗！」

「坊っちゃんは優しくしゃぶってくれるのに、歯も全然当たらないのに...」

「ああ、乳首が固いの、坊っちゃん、それが好きなの？」

黒子はそれが好きになり始めていた。あの臆病者の呼び名で呼ばれるのが好きになり始めていた。もしかしたら、トシロウの代わりに坊っちゃんになれるかもしれない。もっとも、彼らは既に黒子が黒子だと思い込んでいた。しかし、黒子がそのことに意識を集中させようとすればするほど、その気は薄れていった。ただ、あまりにも気持ちが良いすぎたのだ。

ペニスを握る手の動きが速まるにつれ、彼の思考は完全に停止した。口の中の太いペニスに押し殺されたように呻き声を上げ、サトシの指の中に精液を放出した。

背中にいた従者も、一秒ほど経って呻き声を上げた。

「坊っちゃん、イッたでしょ？ そんなに締め付けてるから、私、私...できない...」

ハルもすぐにイッて、黒子の奥深くに自分のペニスを突き入れた。可哀想な男は震え、足が震え上がった。

「ああ、ああ、ごめん、ごめん坊ちゃん、恥ずかしいでしょう？ そんなつもりじゃなかったのに...」

黒子は口の中にあるペニスから逃れようともがき、涙目で目を潤ませ、再び前腕に倒れ込み、息を切らした。

「違う、それに私はあなたの坊っちゃんじゃない、汚れてもいいし、中に出してもいい」彼は吃り、すすり泣くような声で言った。二人の扱いは彼にとってあまりにも快感で、実際に涙が目には浮かび、頬を伝って流れ落ちた。

背中にいた従者はゆっくりと引き抜かれ、黒子の腰を優しく撫でた。胸を揉んでいた従者は彼を抱きしめた。

「坊っちゃん、少し泣いてもいいんだよ。全部出しなさいよ...」

黒子はそんな言葉を聞くのに慣れていなかった。生まれてこのかた、いや、藤四郎は、泣くのは悪いこと、男らしくないことだと教えられてきた。そして彼もそう思っていた。しかし、ここで彼は醜い鼻息を止めることができず、シャツに顔を押し付けていた。

男たちは彼を少し休ませ、背中と頭を優しく撫で、何気ない言葉で慰めてくれた。彼はようやく、自分が快感で圧倒されているのではなく、彼らが望むように呼んでくれない、そして彼らの高圧的な優しさに圧倒されているのだと理解した。自分がこんなにも承認欲求が強いのが気に入らなかった。でも、そうだった。

そして、そのことについては考えたくなかった。彼はそれらを振り払い、仰向けに倒れ込んだ。尻は自分の精液で濡れた場所に落ちた。マスクが首に滑り落ち、顔が露わになったが、熱すぎてマスクがないことを全く感じなかった。彼は顔を横に向け、ちょうど自分を抱きしめている従者の方へと向けた。

「ミチさん」と彼は呟き、誘うように脚を開いた。彼は軽く微笑み、潤んだ表情を浮かべた。男はただ息を呑んで頷き、以前の従者を黒子の美しく筋肉質な脚の間に這わせた。

挿入口は天国のような心地よさだった。別の男の精液で滑らかに覆われ、入り口は柔らかくふっくらとしていた。ミチはすぐにうめき声をこらえることができなかった。黒子は唇を噛み、再び満たされた感覚に目を白黒させた。彼は枕に頭を預け、背中をきつく反らせ、まだ自分の上に立っている番兵を見つめた。彼のペニスは重く濡れていた。

「うーん、アキラさん」アキラは再び微笑んだ。今度は少しだけ大きく微笑んだが、顔はまだ涙で潤んでいた。番兵に手を差し出し、自分も丁寧に膝をつき、坊っちゃんが届くようにした。「ありがとう...」

「大丈夫だよ、黒子ちゃん」

黒子は訂正しようと口を開いたが、すぐに眉をひそめた。そうだ、彼は黒子だった。これが正式な名前だった！

「あ、冗談だよ、坊っちゃん」アキラは笑いながら彼の顔を掴み、親指を彼の口に押し込んだ。それがなければ、黒子は恥ずかしさで顔を赤らめて抗議を始めていただろう。しかし、指は舌の上で強く押し込まれ、再び男の手に取って滑らかに押し込まれ、口と喉が一直線になった。「だって、こんな風に私たちの面倒を見てくれるのに、お前をただの凡庸な人間に貶めるわけにはいかないんだから...」

こうして、両脇の男が再び彼を犯し始めた。彼らの動きは荒々しく、ほとんど制御されていなかったが、黒子はますます呻き声を上げた。突き入れられるたびに腹が痙攣し、手は自分の喉元に当てられ、挿入されるたびにペニスが満たされていくのを感じた。下の男の体を締め付け、上の男の体にはさらに強く反り返った。

他の二人は畏敬の念を抱いて見守る中、サトシは黒子の精液で濡れた手で体を包み込んだ。男が身悶えし、美しい形を作り、突き入れられるたびに胸が跳ね上がるのを彼は見つめていた。彼はもう我慢できず、黒子の上に這い上がり、ペニスを胸に押し付け、網の下に滑り込ませた。

「お前はいつもよく練習して、こんなに美しい体格になったな」彼はうめき声を上げ、黒子の乳首に自分のペニスを一度、二度押し付けた。「坊っちゃん、君は何でもできるし、ハンサムだし、柔らかいし...」

彼はとりとめもなく喋り続けた。汗ばんだ黒子の胸の上を滑る手は、滑らかだった。彼の手は男の乳首に伸び、ミチが以前したように、ひねったり引っ張ったりした。

黒子はペニスに触れられなくても、その感覚に陶然としていた。そして、彼のペニスは、突き入れられるたびに、引き締まった腹に濡れて叩きつけられる様は、なんとも美しい光景だった。自分の喉を掴んでいない方の手はシーツの中で握り締められていたが、すぐに再び硬くなっていたハルに引っ張られ、彼のペニスに巻き付けられた。

「大丈夫かい、坊っちゃん。君は本当に魅力的すぎる。君は本当に最高だよ、ほら、僕たちは君を本当に大切に思っているんだ」家臣は息を切らしながら、緩い握手に身を委ね、自分の手で握りしめ始めた。

黒子はたとえ本当に答えたくても、答えられなかった。そうでなければ、彼は自分がこの場から離れた、別の次元に漂っているように感じた。どんなに抵抗しても、口から出てこなかっただろう。黒子の代わりに、冬獅郎があの脳に戻り、相手の行動の結果に再び向き合っているようだった。

四人の男たちに絶え間なく褒められ、優しく触れられ、頬を伝う涙。一人がキスで涙を拭うのを感じたが、そのせいで嗚咽はますますひどくなり、口の中の肉が喉に詰まった。咳をさせようと男が離れると、彼はただ太ももを掴んで押し返した。

誰にも去ってほしくなかった。この至福が永遠に続いたら良かった。しかし、男たちはセックスの神などではなく、仕事の都合で人付き合いを避けている、ただの召使いに過ぎなかった。だから、そんなに長くは続かないだろう。

最初に屈したのは、さっきまで我慢していた乳首をこすっていた男だった。彼は屈み込み、俊郎の滴る胸に顔を押し付け、小さく「坊っちゃん」と呻きながら、網の下に精液を飛び散らし、汚して、すでに汚れた体に張り付かせた。

すると、先ほどまで過敏だったハルがトシロの手の上に射精した。彼は身をかがめて顔を手のひらに押し付け、丁寧に舐め上げながら、またもや謝罪の言葉を呟いた。

サトシはすぐに引き抜き、トシロの上に覆いかぶさり、二人のペニスを合わせた。腰を下ろし、大きく喘いだ。言葉は枯れ、ただ野性的な欲望が目にと宿っていた。

そうしている間も、アキラは必死にトシロの喉を突き上げ続け、ついには限界を感じた。その時、彼はペニスを抜き、男の顔と首筋に白い糸が染み渡り、トシロの紅潮した艶やかな肌に絡みついた。トシロは口の中にあった玩具を失った苛立ちで眉をひそめながらも、大きな声で呻いた。

「俊郎坊っちゃん、怒るなよ」衛兵は微笑み、口の端に溜まった精液を俊郎の柔らかな唇に押し付けた。彼は目を閉じ、再び指を吸い始め、丁寧に舐めた。

その動きは、家臣が下から突き上げてくるのと同時に、彼を再び絶頂へと導いた。彼が崩れ落ちると、衛兵は彼を足で固定した。彼は震え、のたうち回り、腹部に白い血だまりを作った。

俊郎は口から指をポンと出し、ため息をつき、ゆっくりと力を抜いた。頭がぐらくらして重く感じ、徹底的な耕作の後、体は完全に力尽きていた。彼は目を閉じ、腕を目の上に回して、顔の状態を隠した。

「ありがとう、俊郎坊っちゃん！」

「うーん、結構です、結構です…」と彼は疲労感で頭がいっぱいになる前に言うことしかできなかった。

俊郎は開いた障子から部屋に差し込む明るい朝の光で、ぼんやりとした目を開けた。不満をもらすこともせず、ただ毛布の下で反対側に寝返りを打った。しかし、それが手足の痛みという返事をくれ、彼は小さくうめいた。

「俊郎坊ちゃん？」

目を再び開けると、昨夜一晩中一緒に過ごした同じ四人の男たちが見えた。彼らは身支度を整え、それぞれの手に食事の盆を持っていた。俊郎はゆっくりと彼らを見つめ、まっすぐに座り上がったが、昨夜の飲酒のせいで頭がずきずきと抗議した。少なくとも、体は清潔だった。

「はい？」と彼はかすれた声で答えた。喉が完全に詰まっていたからだ。一番背の高い護衛の明は、その声に少し頬を赤らめた。

「こちらに、お食事をお持ちしました。舞鶴様がお作りになったものです」彼らは全員頭を下げ、再び座った。「一緒にお食事をいただいてもよろしいでしょうか？」

彼らの姿を見て、俊郎は自己憐憫と後悔に浸りたくなった。なぜ昨日あんなことをしたのか？愚かで軽率、完全に理性を失った行為、だから彼はこの家の当主になれなかったのだ...

彼はため息をつき、うなずいて、彼らから目をそらし食事に視線を向けた。小さな温かい麺のスープの椀に手を伸ばした。

しばらく無言で食事をし、朝の静寂の中では箸の音、すする音、噛む音だけが聞こえた。俊郎は昨夜の冒険の後で体が弱っているように感じ、できるだけ早く横になりたかった。

「俊郎坊ちゃん」男の一人、聡が椀を置いて声をかけるのが聞こえた。「私たちはただ...」

「謝らないでください、私自身の軽率さでした」

「いえ、坊ちゃん」春が始めた。「私たちはただ知りたいのです。なぜ昨日、ご自分について心配になるようなことをたくさん仰ったのですか？」

俊郎は男を鋭く見つめ、自分の皿を置いた。歯を食いしばって表情を落ち着かせ、目の前にある五つの湯呑みにお茶を注ごうと手を伸ばした。

「俊郎坊ちゃん、私たちはただ心配しているのです」明がため息をつき、震える彼の手から茶瓶を取った。俊郎はすでに少しこぼしていた。

「まるで...本当にご自分を憎んでいらっしゃるように聞こえました」道が優しく声をかけ、俊郎の目を覗き込もうと少し顔を下げた。しかし俊郎の目はきつく閉じられ、涙を堪えようとしているかのようで、顔は背けられていた。

彼は黙ったまま、夜着に指を絡ませていた。それについて考えたくなかった、他人に自分の頭の中がいかに恐ろしいかを知られたくなかった。そして今、一夜の酔いと制御できない欲望のせいで自分をさらけ出してしまった。

一分が過ぎ、俊郎の呼吸は荒くなり、そして激しくなり、もう涙を堪えることができなくなった。彼は突然大きく啜り泣き、前かがみになり、片手を口に当て、もう片方の手で自分の腹を抱いた。

「坊ちゃん！」彼らは次々と叫び、俊郎はすぐに抱擁に包まれた。俊郎は静かに泣いたが、何かの発作の最中にいるかのように息をし、パニックを起こしていた。彼は呻き、袖で顔を拭い、涙を止めて鼻水を止めようとしたが、それはただ肌をより一層焼いた。

彼らは俊郎をしっかりと抱きしめながら泣かせてやり、俊郎は抜け出そうとしなかった。周りの温かい体が彼を徐々に落ち着かせ、現実に戻した。彼らがなぜ自分を好きでいてくれて、そばにいてくれるのか本当に理解できなかったが、明らかに彼らはそうしてくれていた。そして少なくともそれは、自分が完全に価値のない、とんでもない愚か者ではないということを意味していた。

「俊郎坊ちゃん、そんなにご自分に厳しくなさないでください」

「確かに困難ですが、きっと大丈夫です。お父様のなさったことが愚かだったのは、私たち皆が知っています」

「私たちは皆、同じようにあなたを愛しています。あなたは優しく、公正で、高潔です」

「ただ、もうご自分について悪いことは仰らないでください、俊郎坊ちゃん」

「とても心配になるのです...いつかすべてうまくいきます。ただご自分に息をさせてあげてください」

俊郎はゆっくりと落ち着き、彼らの抱擁の中でリラックスした。目は涙でかすみ、焦点が定まっていなかった。議論する気力は本当になかった。そして何の権利があるというのか？彼らは皆正しかった。彼はいつも自分の人生、行動、存在を過度にコントロールしようとしていて、それが彼にもたらしたのは痛みだけだった。

彼はため息をつき、再び顔を拭った。

「私は...努力してみます」

男たちの慕わしげな視線を感じて、彼は真っ赤になり、再び下を向いた。拳に向かって小さく咳をし、眉をわずかにひそめた。

「さて。食事を終わめしょうか？お茶が冷めてしまいます」